

福岡工業大学 機関リポジトリ

FITREPO

Title	補文標識の分布について
Author(s)	宗正佳啓
Citation	福岡工業大学研究論集 第47巻第1,2合併号(通巻72号) P7-P10
Issue Date	2015-2
URI	http://hdl.handle.net/11478/1265
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher

Fukuoka Institute of Technology

補文標識の分布について

宗 正 佳 啓 (社会環境学科)

On the Distribution of Complementizer

Yoshihiro MUNEMASA (Department of Socio-Environmental Studies)

Abstract

This paper is concerned with cross-linguistic variation and diachronic change of (null-) complementizers in the embedded clauses, deriving the distributional properties from interaction among universal constraints in Optimality Theory (OT) that we will be proposing below and their hierarchy. One constraint is the constraint HEAD that requires overt elements in the head position. Another constraint is the constraint PARSE concerning parsing. The other constraint is the constraint *MOVE that requires economy of movement. English had the constraint hierarchy HEAD»PARSE»*MOVE prior to the late 16th century, but resulted in the constraint hierarchy PARSE»*MOVE»HEAD in the period by virtue of constraint demotion of HEAD to the lowest stratum. A causal relationship between the beginning of introduction of null-*that* in the embedded clauses and the demise of doubly-filled COMP and the sequences of *that*-trace is explained as a consequence of this reranking. The constraint hierarchy HEAD»PARSE»*MOVE is held in variants of English and the Germanic languages except Standard English and High German (Standard German), and thus doubly-filled COMP and *that*-trace effect are allowed in these languages.

Key words: *complementizer, T-to-C Movement, constraint, ranking, language variation*

1. 序

英語の不定詞節に於いては、want タイプの動詞補文に代表されるように、その節内で語彙主語が生起する場合もあれば、非顕在的な PRO が生起する場合もある。しかし、この主語に関しては個人差があり、PRO を次のように語彙化する話者もいる。

(1) I do not want myself to be defined in any articular way.

(BBC News, May 15, 2003, http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/3029861.stm)

また、通常 try タイプの動詞補文に於いては、その主語は語彙化されず、義務的コントロールを受ける非顕在的な PRO のみが生起する。しかし、この try タイプの動詞補文に関しても個人差があり、(2)のように話者によっては語彙主語を容認し、さらに、英語の一方言であるオザーク英語では、こうした語彙化が行われている。

(2) a. He was too poor in spirit ever to try himself to

paint one of the big machines which made one a historical painter. (R.Fry, *Characteristics French Art* iii.62, *OED*)

b. Lord George Cavendish tried Godolphin to be a good horse. (J. Kent, *Racing Life Ld. G. Cavendish Bentinck* 47, *OED*)

こうした複雑な言語差異は不定詞節における主語だけでなく、主要部のレベルにも当てはまり、その顕在化・非顕在化に関して複雑な言語差異がある。本稿では、特に CP の主要部に生起する補文標識 *that* に焦点を当て、その分布に関する共時的・通時的言語差異について考察を試みる。

2. 制約

補文の *that* が生起する場合、通常 CP の主要部に基底生成すると考えられている。しかし、通言語的な分析を行うと、*that* は基底生成するのではなく、移動によって CP の主要部に導入されていることが分かる。例えば、ケベック州のフランス語では *that* に相当するものが T-to-C 移動により CP の主要部に生起する。イタリア語のロマグノロ方言やアイルランド語においても同じ現象が観察される。

- (2) Quoi que tu as fait? (Quebec French)
 what that you have done
- (3) a. I wondered where were they going.
 b. I wonder which dish that they picked.

また, Henry (1995) によると, 英語の一方言であるベルファスト英語では, (3)のように埋め込み疑問文にも主語・助動詞倒置が観察され, CPの主要部に助動詞の代わりに that が生起することがあるという。この場合助動詞と that の選択は随意的である。主語・助動詞倒置は移動を伴いコストがかかるので, 経済性の観点からすれば常に that が基底生成することになるが, 実際助動詞も生起可能である。従って, that は主語・助動詞倒置と同じく T-to-C 移動により CP の主要部に移動していると考えられる。

言語の中には, アイルランド語のように, 英語の that に相当する補文標識が, 場合によっては TP の主要部の要素とアマルガムを形成する言語がある。

- (4) Irish
 Dúirt sé go dtiocfadh sé.
 say(Past) he Comp come(Condit) he
 'He said that he would come.'

この事実は当該の補文標識が CP の主要部に移動せず, TP の主要部に残留していることを示唆している。しかし, 英語においては, 補文標識 that は TP の主要部に残留することはないので, 上記のように T-to-C 移動によって CP の主要部に生じると仮定する。補文に that が生起しない場合も, 最近の生成文法理論に従い, その補文は位相 (phase) である CP まで投射し, that が生起する場合は T-to-C 移動によって CP の主要部に移動し, that が現れない場合はその移動がなく, CP の主要部は空になると考える。では, that の移動を駆動するものは何かという疑問が生じるが, ここではその移動を駆動するものとして主要部版の EPP とも言うべき HEAD という制約を設ける。この制約は投射範疇の主要部に顕在的要素を要求する制約であり, もし CP の主要部が空の状態であればこの制約に違反するため, that が T-to-C 移動によって CP の主要部に移動すると考える。但し移動は自由に行えることはなく, Chomsky が提案した Last Resort Condition 等の経済性の原理が課されることになるが, ここではこうした移動の経済性を要求する制約の一つとして, 移動を全面的に禁止する *MOVE という制約を設ける。

移動には様々な種類があるが, 例えば wh 移動に関しては一つには Rizzi (1996) の Wh-criterion 等の原理の要請によって駆動されていると考えられる。言語の中にはルーマニア語やブルガリア語のように, すべての wh 句が顕在的に CP に移動する言語があるが, その一方で日本語や中国語等の言語では wh 句の顕在的な移動はない。ここでは最適性理論で採られているように, 言語差異は制約の階層差に還元されると仮定するので, 日本語や中国語では *MOVE が Wh-criterion よりも上位にランクされ, そのた

め wh 句が元の位置に留まるものと考えられる。同様に, *MOVE が HEAD よりも上位にランクされていれば that の移動はなく, CP の主要部は空の状態になり, 一方 HEAD が *MOVE よりも上にランクされていれば, 常に that が生起することになる。前者に相当する言語としてはハイチ語, カビエ語, コボン語, ピラハ語等があり, 後者に相当する言語としてはアイスランド語, イディッシュ語, フリジア語, ババリア語, オランダ語, 西フラマン語等があるが, こうした言語差異は HEAD と *MOVE の階層差の帰結として説明される。

英語に関しては, that なし補文が容認されるので, 上記の制約が *MOVE ≫ HEAD と序列化されていると仮定してみよう。しかし, この階層では英語では事実反して補文に that が全く生起しないことを予測することになる。また, that なし補文は特定の動詞補文でのみ認められ, factive verb, response-stance verb, 或いは subjunctive mood を示す動詞補文において that なし補文は容認されないという主張もある。しかし, ACE, BNC, LOB 等様々なコーパスを分析すると, こうした動詞補文においても that が無い文が散見される。

- (5) a. We regret we cannot accept special requests...
 (BNC)
 b. I will admit Odessa lies to the south of Kiev...
 (ACE)
 c. I suggest we all have a good shower and hit the bunk. (LOB)

こうした事実は, 英語では that の導入は随意的であることを示唆しているように思われる。しかし, Bolinger (1972) や Erteschik (1973) が主張するように, that 補文と that なし補文は意味的に異なっている。(6a) のような発話様態動詞の補文や, (6b) のような複合名詞句の補文は that の省略は容認されないが, これらの補文には意味があり, Erteschik (1973) によると, それを明示するために that が導入されるという。

- (6) a. She whispered *(that) her mother was seriously ill.
 b. We cannot deny the fact *(that) smoking leads to cancer.

そこで, これらの分析に従い, that が含まれる補文の意味を明示する必要が生じた場合, that が生起すると考えてみる。また, 他に that が生起する環境としては, (7) のように主語が節である場合や補文に副詞類等が生じる場合があるが, これは that の導入により節境界の曖昧さを回避するためであると考えられる。

- (7) a. *(That) John married Mary surprised me.
 b. We maintain *(that) in London a nice flat is hard to find.

That 補文と that なし補文の意味の違いを that の導入の有無で明示するとすれば, that が導入された場合, それは先ず TP の主要部に導入されることになるが, そのままでは

主語と動詞との間に介在するため、節境界の曖昧さが生じる。これは(7)の *that* が不在の場合における節境界の曖昧さという点で状況が同じである。そこで、*that* の T-to-C 移動はこのような文解析上適切な解釈を要求する制約によるものと考え、その制約を便宜上 PARSE とし、これが *MOVE や HEAD よりも上位にランクされているので、*MOVE に違反しても *that* が移動によって補文の CP の主要部に生起すると考える。上記の補文標識を全く導入しない言語では、*MOVE が他の制約より上にランクされていると考えられる。ただ、こうした言語で補文標識が TP の主要部に導入されれば、*MOVE が上位にあるため、その位置に留まることになる。しかし、これらの言語は SVO 又は SOV 言語であり、TP の主要部に補文標識が留まれば、それは主語と動詞又は目的語の間に介在するため、節境界の曖昧さが生じ PARSE に抵触する。最適性理論で考えられているように、上位の制約が満たされている場合、それよりも下にランクされている制約の違反がより少ない方が適格な文として選択されるため、補文標識が TP の主要部に留まり PARSE に抵触するより、それを導入せず PARSE に抵触しない方の文、つまり補文標識が全く生起しない文が選択されることになる。

3. 通時的言語差異

現代英語では前述のアイスランド語等とは異なり、常に補文に *that* が生起することはないが、古英語期や中英語期ではそうした言語と同じ特徴が観察される。OED (CD-ROM), *The Helsinki Corpus of English Texts* で変異形を含め幾つかの動詞の補文を調査、検索してみると、*that* なし補文が頻繁に導入されるようになるのは16世紀の後半であり、それまでは補文に *that* がほぼ義務的に導入されていることが分かる。次に記すものは調査した動詞の種類(変異形、過去形を含む)であり、()内の%は16世紀半ばまでのそれぞれの動詞補文に *that* が含まれる例の割合である(witan(87.2%), þencan(87.5%), think(74%), believe(98%), know(84.6%), find(77%))。

このように16世紀半ばまでは動詞補文に *that* が含まれる割合が圧倒的に多いが、*that* が不在の補文に関しては、恐らく OCP (Obligatory Contour Principle) effect の回避といった音韻的理由によるものか、あるいは他の何らかの理由で *that* が削除されたのであろう。また、*that* なし補文が頻繁に導入されるようになる16世紀の後半の *that* の導入状況を知るために、電子テキスト化したシェイクスピアのすべての戯曲 (*Mr. William Shakespeares Comedies, Histories & Tragedies*) を対象に幾つかの種類(動詞補文)を調査してみた。結果としては、動詞 know に関しては、現在形、過去形を含め *that* が導入された補文は8.5%、動詞 think に関しては、*that* が導入された補文は20%、動詞 believe に関しては、*that* が導入された補文は35%であり、*that* なし補文の方が

多く、特に know の補文においては *that* なし補文が圧倒的に多い。

16世紀の後半までに補文に *that* が義務的に生起するのであれば、*that*-痕跡という連鎖が容認されることが予測されるが、実際、現代英語では容認されない *that*-痕跡が古英語期や中英語期では認められ、いわゆる *that*-痕跡効果がない。この *that*-痕跡効果が生じるのはこれも16世紀の後半である (Bergh and Seppänen (1992) 参照)。

普遍文法は制約により成るとする最適性理論では、制約は言語ごとに階層化されており、言語の通時的差異は制約群に部分的な再階層化が施されることで生じると考えられている。そこでこの概念に従い、英語では16世紀の後半までは PARSE ≫ HEAD ≫ *MOVE という階層であったのが、それ以後再階層化で PARSE ≫ *MOVE ≫ HEAD となり、従って、*that* なし補文が導入される一方で *that*-痕跡という連鎖が消滅して行ったと考えられる。

では、なぜ16世紀の後半に再階層化が行われたのかという疑問が生じるが、これはその時期までに消失した動詞の移動と関連しているように思われる。古英語期より続く V2 (動詞第二位) 現象は中英語期に衰退し、15世紀の後半に消失している (Kemenade (1987))。また、現在のフランス語に観察される V-to-T 移動に相当するものが、中英語期の終わり頃まで観察され、16世紀の後半にはほぼ消失している (Roberts (1993))。That の移動は動詞の移動と同じく主要部移動であり、恐らくこの動詞の移動の消失が引き金となり、*MOVE が HEAD より優位になる制約の階層化を誘発したのではないかと思われる。

現代英語では動詞補文に義務的に *that* が導入されることはなく、*that*-痕跡も容認されない。先程言及したアイスランド語、イディッシュ語、フリジア語、ババリア語、オランダ語、西フランダース語は *that* に相当する補文標識を義務的に導入する言語であるが、興味深いことにこれらの言語は *that*-痕跡という連鎖を容認する (Munemasa (2003, 2006) 参照)。こうした言語差異はその言語を話す話者の制約群が16世紀後半までの英語の制約階層、つまり PARSE ≫ HEAD ≫ *MOVE と序列化されていることの帰結として説明できる。また、高地ドイツ語(標準ドイツ語)も英語と類似した通時的変遷を示し、高地ドイツ語は英語と同じく動詞補文における補文標識の導入が義務的ではなく、また *that*-痕跡も容認しないが、古高地ドイツ語は16世紀以前の英語と同様補文標識を義務的に導入し、さらに *that*-痕跡を容認していたという事実がある (Eythórsson (1996))。こうした通時的変遷もここで提案する制約の階層差に収斂できる可能性がある。

4. 結語

以上、本稿では、制約の階層に基づき補文標識の分布に関する共時的・通時的言語差異に対して説明を与えてきた。

制約の階層差に基づく分析には、その順列と文法の数、階層決定の際の方向性等検討すべき問題もあるが、言語研究における通言語的変異の可能性がどこから来るかを追求する上で、可能なアプローチの一つとなるのではなかろうか。

参考文献 (言及分のみ掲載)

- Bergh, Gunnar and Aimo Seppänen (1992) "Subject Extraction in English: the Use of the *That*-complementizer," *English Historical Linguistics*, ed., by Francisco Fernández, Miguel Fuster, and Juan José Calvo, 131-143, Benjamins, Philadelphia.
- Bolinger, Dwight (1972) *That's That*, Mouton, The Hague.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Eythórsson, Thórhallur (1996) "Functional Categories, Cliticization, and Verb Movement in the Early Germanic Languages," *Studies in Comparative Germanic Syntax Volume II*, ed. by Höskuldur Thráinsson, Samuel David Epstein, and Steve Peter, Kluwer, Dordrecht.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Munemasa, Yoshihiro (2003) *An Optimality Theoretic Approach to the C-system and its Cross-linguistic Variation*, Kyushu University Press.
- Munemasa, Yoshihiro (2006) "Notes on Covert *Wh*-agreement," *English Linguistics* 23, Vol. 2, pp. 454-464, Kaitakusha.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the *Wh*-criterion," *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 63-90, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.